**非戦を選ぶ演劇人の会**

**『あきらめない、夏 二〇〇四』**

**二〇〇四年八月十五日**

於：紀伊國屋サザンシアター

台本構成：渡辺えり子、永井愛、関根信一

総合演出：西川信廣

第一部「パレスチナの声　イスラエルの声」台本構成：渡辺えり子

オープニング　テツandトモ「なんでだろう」

「なんでだろう」終了後、音楽入る。

朗読者、上手と下手から登場。舞台の所定の場所に立つ。

音楽、続く。

【１　　　　　　】

食器を洗う手

【２　　　　　　】

コーヒーを入れる手

【３　　　　　　】

頬を撫でる手

【４　　　　　　】

抱きしめる手

【５　　　　　　】

そんな手が消える

【６　　　　　　】

消える　消える

【７　　　　　　】

もう、いない

【８　　　　　　】

今朝までそこにいて　そこで笑って私を見つめていた顔が

【９　　　　　　】

消える

【10　　　　　　】

顔が消える

【11　　　　　　】

消える

【12　　　　　　】

消える

【13　　　　　　】

もう、いない。

【14　　　　　　】

言葉が消える

【15　　　　　　】

声が消える

【16　　　　　　】

仕草が

【17　　　　　　】

ぬくもりが消える

【18　　　　　　】

消える

【19　　　　　　】

消える

【20　　　　　　】

もう、いない。

【21　　　　　　】

もう、二度と会えない。

音楽、終わる。

【22　　　　　　】

沖縄県那覇市うまれの戦場カメラマン石川文洋さんは、今年「死んだらいけない」という名前の本を出版しました。「ぬちどう宝」「命こそ宝」だと、生きること、それ自体がすばらしい、と、彼は書きます。そして、「命が大切なことはだれでも知っていることと言う。でも、本当に知っているのだろうか？　」と問いかけます。

【23　　　　　　】

自分を理解してくれていた人を失うことは本当にさみしいことだ。

【24　　　　　　】

もし、母が死んでいたら、私も、私の子供も生まれていなかった。当然だ。でも、この当然のことを壊すのが戦争だ。生きたい人の命をうばうのが、戦争だ。

【25　　　　　　】

戦場に小鳥を持っていく兵士がいた。夕方になるとギターを弾きながら歌を歌う兵士もいた。優しい心の兵士が、戦闘になると捕虜を拷問し、殺害し、首を切った。

【26　　　　　　】

カメラマンは残酷な場面を撮影することに慣れる。兵士たちは殺すのに慣れてしまう。これが、一番恐ろしい。

【27　　　　　　】

つねに死と向き合い、殺すことに慣れてきても、自分の死を考える時、たまらなく怖くなって故郷へ帰りたくなる・・・・とあるアメリカ兵は話していた。私は、いち兵士を憎いと思ったことはない。彼らは国家から送り込まれた、かわいそうな青年なのだ。そして、そんな普通の青年を凶器にするのが、戦争なのだ。

【28　　　　　　】

ベトナムのあと、私はいろいろな戦争を取材した。わずか四年間で、多くの人々が虐殺されたカンボジア、そしてラオス、ユーゴ、アフガニスタン。いま、それらの国の残された人たちの誰もが、辛い気持ちを抱いている。戦争の恐ろしさは、いちどきに、大勢の不幸な人々をつくってしまうことである。

【29　　　　　　】

パレスチナ・ラファ。二〇〇四年五月二十三日　サントラ・ジョーダンの報告

朗読者、一斉に、上手（イスラエル）と、下手（パレスチナ）に分かれる。これ以降、中央の見えない線を境に、イスラエル人は上手側から、パレスチナ人は下手側から発言をする。（台詞を言いながら、移動する場合もあるだろうし、移動してから台詞になる場合もあるだろう）

イスラエル人、パレスチナ人の指定がない者は、中立者または、客観的な視点として、中央で言う場合もあるだろうし、双方に向かいながら、動きながら言う場合もあるだろう。舞台上に置かれた椅子は、椅子として使ってもいいし、何か他のものに見立てて、使っても構わない。

イスラエル側に、椅子が多く、パレスチナ側には、椅子が一つしかないため、パレスチナ側の人間は、座る場合、床に座ることになる。

【30　　　　　　】（パレスチナ人）

三歳半のラワン・アブ・ゼイドはわずかな小銭をもって姉たちと一緒にお菓子を買いに店に出かけた。イスラエル軍の攻撃がはじまって一週間、家に閉じ込められてうんざりしていた女の子たちは、激しい攻撃の束の間の小康を利用して外に出たのだった。しかし、その数分後、ラワンはイスラエル軍の戦車によって顔と首を撃たれた。死を前にしてラワンが残した最後の言葉は「マミー、マミー」だった。娘の死から三時間後、父親のムハンマドは小さなラワンの遺体を埋葬した。彼が彼女のために残せたものは、小さなかわいいラワンの写真一枚だけだった。

【31　　　　　　】

　二〇〇四年五月十六日　ムハンマドＱの報告

【32　　　　　　】（パレスチナ人）

　いとこのアシュラーフは三十七歳。十二歳と、八歳と、四歳の子供の父親だった。昨晩、拡声器を使って大声で怒鳴りながらラファのあちこちを走りまわっていたイスラエル兵たちが、突然、アシュラーフ一家と、同じ一画に住んでいる数十の家族に対して、イスラエル軍はこれからこの通りのすべての家を破壊するので十分以内に立ち退くように、と命じた。みんな、殺されるのを恐れて、白い旗を振りながらそれぞれの家から退避していったが、アシュラーフは、戦車の兵士らに、何とか家を壊さないでほしいと頼みはじめた。そして、とうとう、こう言ってしまった。「おれの家をブルドーザーで壊すと言うのなら、まず、おれたちを押しつぶしてからにしろ」と。彼らはそうした。操縦者がブルドーザーを前進させ、アシュラーフと妻と義妹を家の中に押し込んで、そのまま、三人と家の中にいた子どもたちもろとも、家を破壊したのだ。朝になって住人たちが集まり、何とかアシュラーフ一家を助け出そうと必死に瓦礫を取り除いていった。アシュラーフはすでに死んでいた。

【33　　　　　　】

　ラファのブラジル地区に住み込み活動するNGO職員の寺畑由美さん。彼女がお世話になった通訳の青年アベッドさんの一家に今年の七月不幸が訪れた。アベッドさんの証言。

【34　　　　　　】（パレスチナ人）

　「サロンの中で友だちと冷たいものを飲んでいたら、突然「バタッ」と何か重いものが地面に落ちる音がした。外に目をやると、リファアットが地面に倒れている姿が見えた。僕は慌てて外に出て彼の側に駆け寄った。彼の顔は真っ白になって、口から血を流していた。彼に何度声を掛けても何も言わなかった。急いで病院に担ぎ込んだけど、間もなくリファアットは息を引き取った。レントゲンを撮ってみたら彼の心臓に銃弾が見つかったんだ。イスラエル軍が町に向けて撃った五〇ミリの銃弾が、座っていた彼の肩を突き抜けて心臓に入っていった。彼は体内出血多量で死んでしまったんだ。」

【35　　　　　　】

　二〇〇四年二月六日のラファ・ブラジル地区。アイヤ・アル・シャエル（十三歳）

【36　　　　　　】（パレスチナ人）

　「夜の十時頃、家族がみんな眠っていた。そして、恐怖で目が覚めた。本当に恐かった。ブルドーザーは突然やってきて、二部屋とお手洗いを壊して行った。家族みんな、ブルドーザーの前に立って大声で叫んだけど、ブルドーザーは止まってくれなかった。お父さんはブルドーザーに向って「家具を家から出すために、ちょっとだけ時間をくれないか」と頼んだけど、ブルドーザーは納得してくれなくて、お父さんに向けて発砲した。お父さんは背中と脚を撃たれた。お父さんは幸い、今はなんとか元気にしている。侵攻の話はたくさん新聞に載ったりしているけど、私にとってはなんだか全てが夢だったような気がしてならない。こういう状況に対して、私たち子どもたちは何も出来ない。パレスチナ自治政府も何も出来ないというのに、私たちに何が出来るというの？　神様、私たちに少しだけの安全を与えてください。」

【37　　　　　　】

　日本で幼稚園の先生をしていた森沢典子さんは二〇〇二年三月五日から二三日までたった一人でイスラエル・パレスチナに滞在し、そこで体験したことを「パレスチナが見たい」という本にまとめました。

【38　　　　　　】

　二〇〇二年三月八日 　パレスチナ・ガザ地区クザール村カマール氏の話。

【39　　　　　　】（パレスチナ人）

　「三月八日のことでした。真夜中過ぎです。パレスチナの救急車が村に入ってきました。けれども中から出てきたのはイスラエルの兵士たちでした。気がつくと村は七〇台の戦車に囲まれていました。イスラエル兵は五つの家を選び、中に入ってきました。その五軒からは村全体が見渡せたからです。彼らは犬も連れていました。家に入ると彼らは男たちに服を脱ぐように言いました。そして腕を後ろ手に縛り、目隠しをしました。家族を一つの部屋に押し込め、二人の兵士が、銃を女と子どもに向けていました。その時には、戦車はすでに村の全域を占拠していました。イスラエル兵士はモスクに入り、スピーカーを使って、アラビア語で外に出てくるように叫びました。我々は武器や銃は使わないとも言いました。人々は外へ出ました。東から三十七台の戦車、一〇台の装甲車、三台のバスが入ってきているのが見えました。次の瞬間、そのすべてが砲撃を始めました。女、子ども、犬も山羊も撃たれました。息子のハリードは足を撃たれました。まだ生きていたので、私は助けにいこうとしました。けれども私の目の前で、戦車が彼を轢いていきました。頭や顔や胸はすべて潰れ、道には跡形も残りませんでした。彼を助けようとして出て行った者は、容赦なく撃たれていきました。私は泣き叫びました。それを止めようとして走ってきた親戚も、撃たれて死んでしまいました。ムハマードは二〇発も撃たれましたが、まだ息はありました。けれども誰一人、彼を助けることも病院に連れて行くこともできませんでした。村の入り口はイスラエル兵によって完全に封鎖され、救急車だろうと何であろうと入れなかったからです。その夜、十八人が殺されました。たった二時間の間に。今は百人以上の人がナーサルホスピタルに入院しています。どのパレスチナ人の家もみんな同じです。農場も壊していきました。

【40　　　　　　】（パレスチナ寄りの日本人）

　ヨルダン川西岸のジェニンでは、国連パレスチナ難民救済事業機関（ＵＮＲＷＡ）が運営する女子小学校を訪ねました。三月四日からの五日間におよぶ侵攻で、戦車によって爆撃を受け、校庭も校舎も銃弾の跡で穴だらけでした。ある女の子が、私にノートを見せてくれました。彼女のノートは、銃弾を受け、ビリビリに切り裂かれていました。そしてその裂け目の間には、まだ弾丸がくいこんだままでした。彼らは、授業中の小学校を銃撃したのです。たくさんの子どもたちがケガをしましたが、病院に運ぶこともイスラエル兵は阻み、助けに入ろうとする者を次々に撃っていきました。この日、ＵＮＲＷＡのジェネラルディレクターが駆けつけてキャンプに入ろうとしましたが、イスラエル兵はそれも拒みました。ＵＮＲＷＡとイスラエルの協定により、国際的な援助のもとに運営している学校などは、イスラエルは攻撃しないと定めています。でもシャロン氏が首相になってから、それは守られていません。

【41　　　　　　】

　ジャーナリストの土井敏邦さんはジュニンの侵攻の際の難民たちの証言をまとめました。

【42　　　　　　】

　イマード・カーセムさん三〇歳の証言。

【43　　　　　　】（パレスチナ人）

　「私は難民キャンプの大半の住民と同様、攻撃の最中、自宅でじっとしていました。そうすれば攻撃から身を守れると考えたからです。しかしイスラエル軍は民家にミサイルを撃ち始めました。住民が中にいようといまいとお構いなしに爆破し、攻撃直前に住民に家から出るようにという事前の警告すらありませんでした。四月八日月曜日の朝五時頃、イスラエル軍は砲撃を開始しました。自宅にこもっていた私は家にミサイルが命中するのではないかと不安でした。前夜から銃撃が続いていたからです。そして遂に家にミサイルが当たり私はミサイルの破片で負傷しました。結局、これが原因で腕を切断することになったのですが。負傷した直後私は気を失い、大量に出血しました。この攻撃で私の家は完全に燃えてしまいました。イスラエル軍は治療を受けさせてくれなかったのかって？　それどころか兵士たちは負傷者を拷問し始めました。重傷者を一ヶ所に集め、そのすぐ後ろには戦車が待機し、今にも動き出してひき殺すかのような音をたてていました。怪我の苦しみは言うまでもありませんが、兵士たちはその音で負傷者たちを怖がらせ、精神的に拷問したのです。

【44　　　　　　】

　七月、イマードはなかなか完治しない右腕切り口の治療のために、ヨルダンへ向かった。しかし国境で彼はイスラエル当局に逮捕され、投獄された。その理由は明らかではない。難民キャンプに住む通訳の話では、獄中のイマードは将来に絶望し、精神的に危機的な状況にあるという。

【45　　　　　　】

　マフムード・ファイードさん七〇歳の証言

【46　　　　　　】（パレスチナ人）

　「私たちは兵士たちに、『家の中に身体の動かない息子がいる』と訴えました。息子の身分証明書も見せました。道にいた兵士の一人が、「帰れ！」と命じました。それで隣の家にいる他の兵士たちのところへ行き、同じように訴えました。何度も何度も懇願しました。それでやっと五人の女性が中に入り、息子を連れ出すことが許されました。 　ブルドーザーがやってきて、息子のいる家を壊し始めました。通りにいた住人たちが『やめて！中に女性たちがいるのよ、止めて！』と叫んでいるのが聞こえました。兵士たちはそのことを知っていました。私たちに家に入って息子を連れ出す許可を与えた兵士たちだったのですから。 　夜は他の場所で眠り、昼間は現場に戻り、息子を捜しました。昨日は一日中捜しましたが、見つかりません。女性たちが息子の近くまで行くと、崩れた屋根の隙間の間で息子は石と砂をかぶっていたというのです。息子はしゃべることもできませんでした。しかしそこへ行った女性によれば、その息子が二言、三言しゃべったというのです。『ヤッラー（神様）、ヤッラー』と。その直後、ブルドーザーの運転手が瓦礫を動かしはじめ、息子のいる場所を埋め始めました。

【47　　　　　　】

ファルア・ジャマールさん 二十七歳の証言

【48　　　　　　】（パレスチナ人）

「四月三日早朝、二人の姉妹は大きな爆発音と青年の叫び声で目が覚めた。ファルワはすぐにイスラムの医療組織「赤三日月社」のマークが入った救急隊員の白衣に着替えて姉と共にその青年を助けようと家を出た。ルファィダによれば、二人は家の外で武器を持たない青年たちの小さな集団と出会った。彼らもまた負傷した青年を助けようとしていた。その救出のためにどうすれば一番いいのかを彼らと相談しているときだった。イスラエル兵たちはその集団に向かって発砲した。それによってルファイダが負傷し、妹のファルワは射殺された。 その青年たちとの話が終わる前にイスラエル兵たちが撃ち始めました。私は太ももを撃たれました。崩れ落ち、膝を骨折しました。妹が私のところへやってきて助けようとしました。その時、腹部を撃たれました。私は妹に「撃たれた」というと、「私も撃たれた」と妹が答えました。私はイスラムの祈りを繰り返していました。そして妹が胸を撃たれたんです。イスラエル兵たちは私たちのすぐ近くにいたから、私たちを目と耳で確認できたはずです。彼らには私たちの姿がはっきりと見えていました。しかし兵士たちは私たちに向かって撃ち続けました。私はもう片方の脚を撃たれました。」

【49　　　　　　】

一九八五年以来、パレスチナを取材し続けている土井敏邦氏はこう書いている。問題は、冷静に考えれば自分たちのために決してプラスにならないはずの自爆テロを、なぜ多くのパレスチナ人が支持するのかということだ。彼らをそこまで追いやっているのは何なのか。 和平交渉の元パレスチナ代表で、民衆の草の根リーダーとして信望の厚いハイデル・アブドゥルシャーフィ氏は「パレスチナ人が罪のない人々を殺すことを望んであのような攻撃を起こしているのではないことを、世界は理解するべきです。それはイスラエルの残忍なやり方でパレスチナ人が深く苦しめられているから起こるのです」と語っている。 もちろんパレスチナ人の自爆テロは許されるべきことではなく、糾弾されるべきである。だが、問題の根源はイスラエルによる“占領”にある。“占領”という状況がパレスチナ人を自爆テロにまで追い込んでいるといえよう。繰り返すが、いかなる理由であろうとも自爆テロは正当化されるべきではない。しかし自爆テロをさらに大きな暴力で抑止しようとしても止めることはできないだろう。それはさらに増幅された憎悪と復讐心となり次の自爆テロ動機を再生していくからである。その根を絶ち切るためには、“占領”という“構造的な暴力”を排除するしかない。

【50　　　　　　】

森沢典子さんは語る。

【51　　　　　　】（パレスチナ寄りの日本人）

「パレスチナといえば、私たちはたいてい、過激派による自爆テロを思い浮かべます。そしてインティファーダといえば、自爆テロか投石による抵抗運動のことだと思っています。でも、私が見たインティファーダは違いました。侵攻を受けて家を壊され、家族を殺されても、花を植え、パンの宅配を続ける町の人たち。冗談を飛ばし、大声で笑い、旅人をもてなす家族。爆撃を受けて壁に大きな穴が開き、外から丸見えの部屋で、人々はコーヒーを飲みながら家族や友人たちと過ごす穏やかな時間を楽しんで、私と目が合うと「ウェルカム！」とミントティーを差し出したり、笑いかけたりしていました。ふだん通りの暮らしを続けること、それこそが人々のインティファーダ、抵抗運動でした。」

【52　　　　　　】

二〇〇〇年九月からパレスチナでは新たなインティファーダが始まり、毎日のように死傷者が出ていました。 二〇〇二年一月エルサレムの繁華街で起きた自爆事件では八一歳のイスラエル人の老人が亡くなり一五〇人以上の負傷者を出しました。自爆したのは初めての女性自爆者で二八歳のワファ・イドリスでした。彼女はヨルダン川西岸のラマラ市近郊、アル・アマリ難民キャンプに住む赤新月社のボランティア救急隊員だったのです。

【53　　　　　　】

パレスチナ人による抵抗運動、インティファーダの取材を続けるジャーナリスト古居みずえさんは彼女の叔母に取材しました。叔母のメイスーンは語りました。

【54　　　　　　】（パレスチナ人）

「彼女の心が傷を負ったのは、負傷者を運ぶ日常の中で、私たちが見えないものを見てきたからだと思う」救急車で妊婦を病院へ運んでいる途中、イスラエル軍の検問所でどうしても通してもらえず、車の中で産み落とされた赤ん坊が死んだことがあった。ワファはその日、帰ってきて「疲れたから」といって部屋にこもり、誰にも会おうとしなかった。 イスラエル軍に頭を打たれた若者を運んでいる途中、若者の頭を動かさないように両手で必死で押さえていた。だが車が激しく揺れ、若者はワファの腕の中で息を引き取った。その日もワファは何も話をしようとはしなかった。 ワファと同じように働いているボランティアの救急隊員は、ヨルダン川西岸とガザ地区で二千人以上いる。高校生や大学生も多い。高校二年生、十七歳のメイスーンは、ラマラにある赤新月社と同様の救急組織、ＵＰＭＲＣ(パレスチナ医療救援センター)で働く。彼女はテレビで傷つく子供たちを見て、いてもたってもいられなくなったのが、働き始めた理由だという。「罪のない人を傷つけるのはよくない。ただ毎日、負傷者の手当てをしていると、やるせなくなってくる。だんだん気持ちが憎しみに変わっていったのはわかる気がする」

【55　　　　　　】

「土井敏邦　「パレスチナの声、イスラエルの声」」

【56　　　　　　】

二〇〇二年四月、包囲から三日目、最初の犠牲者が出た。夜、道端で様子をうかがっていた三人の男たちにアパッチがロケット弾を発射、三人全員即死した。診療所に運ばれた遺体を見た。三十一歳の男性は両脚を砕かれている。十五歳の少年は後頭部から脳が露出していた。閉じられたドアの向こうから家族が「開けて！会わせて！」と叫び、ドアを激しくたたく。しかし救急隊員たちはあまりに無残な遺体をそのまま家族に見せるわけにはいかなかった。三人の遺体は急いで毛布で覆われた。頭部を砕かれた少年には包帯がまかれた。やっとドアが開けられた。頭にスカーフをかぶった若い女性は、土色に変わった肉親の顔を見ると、両手で顔を覆い、「ギャアー！」と悲鳴を上げた。

【57　　　　　　】（パレスチナ人）

七歳の少年、モハマドは、イスラエル軍が家にやってきて両親や姉たちを殺す夢にうなされると言う。そのモハマドに私は「将来何になりたい？　」と訊いた。「医者、エンジニア、学校の先生・・・・」といった答えを予想していた私に、モハマドは笑みを浮かべながらこう答えた。「戦士になって、自爆攻撃をしたい。たくさんのイスラエル人を殺すんだ」　 “死”の意味さえまだ十分理解できていない七歳の少年が、「自爆」という言葉をこともなげに口にする。だがそれはモハマドが異常な少年だからではなく、少年が置かれている環境そのものが異常なのだと私は思った。

【58　　　　　　】

国境警備隊の女性隊員ダナ・シムション 二十一歳は、一九九六年二月二五日、西エルサレムの下町、カタモン地区の自宅付近でバスに乗り、自爆テロにあった。 彼女は一週間意識不明の重体となり、大火傷は二ヶ月経っても完治することはなかった。入院中の彼女は鼻にカテーテルが入ったまま証言した。

【59　　　　　　】（イスラエル人）

激しい怒りと憎しみを感じます。しかし、アラブ人（パレスチナ人）全体に対してではなく、バスを爆破したその本人に対してです。私はその男に対して何も悪いことはしていません。そんな私たちにこんなひどいことをしたその男に激しい怒りを感じるのです。ただ私は、憎しみはどこへも私たちを導かないと思います。誰かを憎んだら適切な判断ができなくなります。どうしてアラブ人全体を憎むべきでしょうか。このテロをやった人物は憎むけど、しかしアラブ人全員を憎むわけではないのです。 すべてのアラブ人が同じだとは思っていません。この人はいいアラブ人で、あの人は悪いアラブ人というふうに見ています。私は彼らが行う個々の犯罪に対して憎しみを抱くのです。私が話をしたことのあるイスラエル内のアラブ人はとてもいい人たちでした。

【60　　　　　　】

どうして彼らはあのようなことをすると思いますか？

【61　　　　　　】（イスラエル人）

わけもなく憎んでいるのです。

【62　　　　　　】

どうして憎むのでしょうか？

【63　　　　　　】（イスラエル人）

私にはどうしてなのかわかりませんが、たぶん小さい頃から、ユダヤ人を憎むように教えられてきたからでしょう。だからユダヤ人を憎んで成長するのです。彼ら自身もどうしてなのかわからないと思いますよ。

【64　　　　　　】

どうしたら解決できると思いますか？

【65　　　　　　】（イスラエル人）

彼らは憎しみを持たないように教育されなければなりません。憎しみは悪いもので、平和は意味あるものだという教育が必要です。

【66　　　　　　】

どんな平和ですか？

【67　　　　　　】（イスラエル人）

ほんとうの平和です。お互いが憎しみあわないような平和、人がバスを爆破するようなことをしない平和です。それが、私が望む平和なのです。

【68　　　　　　】

ダナの両親、父エルカナと母イラナの証言 「どうしてパレスチナ人はこのようなテロを行うと思いますか？　」

【69　　　　　　】（イスラエル人）

「パレスチナ人の中には狂信的な人々がいます。彼らはユダヤ人がこの土地に住むことを望まないのです。しかし、ここは私たちユダヤ人の国です。私たちはこの国を愛しています。彼らはそんな私たちを追い出そうとしているのです。

【70　　　　　　】（イスラエル人）

「私たちは聖書の時代から、ここは私たちユダヤ人の土地だと主張してきました。それに対してパレスチナ人が抵抗しているからだと思います」

【71　　　　　　】

パレスチナ人に何を伝えたいですか？

【72　　　　　　】（イスラエル人）

「イスラエルがパレスチナ自治区を封鎖することでパレスチナ人は失業し、それがハマスなどイスラム・テロ組織への支持を増やすことにつながり、結局、イスラエルのセキュリティーにとってマイナスになるという人がいます。でもどうして私たちが『パレスチナ人は生活が苦しくなると、ハマスを支持するようになる』などと考慮しなければならないのですか。そんなことは私たちが知ったことではありませんよ。もしイスラエルに封鎖を解いてほしければ、パレスチナ人たちはイスラエル全土でのテロをやめるべきです。テロがなければ、パレスチナ人はイスラエルで働くこともできるのです」

【73　　　　　　】

二〇〇一年五月二〇日 ハンユニス難民キャンプに住む二人の青年。 ガザの名門校イスラム大学工学部で学ぶ二〇歳の大学生アブドゥルマーティー・エルアサールとモスクで福祉活動をしていた一九歳の青年イスマイーンが検問所で自爆した。 アブドゥルマーティーの叔父アマール・エルアサールの証言

【74　　　　　　】（パレスチナ人）

甥の死の二十日前に私はガザ市へ行きました。その途中の検問所で偶然、彼と会いました。甥はテレビニュースで、イスラエル軍による女性や子ども、母親に対する犯罪を目の当たりにして、いつも痛みを感じ、怒りを募らせていました。イスラエル軍によって誰かが殺されたり負傷したりすると、彼はそれが夜中であろうと早朝であろうと、収容された病院へ駆けつけました。 彼はパレスチナ人の自由を求めていました。二〇〇〇年九月に始まった今回のインティファーダの初期、父の目の前で射殺されたムハンマド・デュラ少年の死に大きな衝撃を受けていました。その子を死から守るために世界は何も行動を起こさなかったからです。イマン・ヘッジョという六カ月の幼女がイスラエル軍の砲撃で殺されたことに対してもそうです。その子は全く何の罪もない幼女でした。老人や女性もそうです。毎日、無実のパレスチナ人が次々と殺されていきます。負傷して身体が麻痺し動かなくなった例もあります。 イスラエル軍によって私たちの子どもたちが殺されている。自分たちの目の前で同胞たちが殺されていくのを目の当たりにして、その復讐としてイスラエル人を殺すべきだと考えたのです。つまり彼は復讐のために自爆攻撃をしたのです。

【75　　　　　　】

ハンユニス難民キャンプで暮らす青年エマド 二十一歳の証言

【76　　　　　　】（パレスチナ人）

「私たちの世代のパレスチナ人が抱いているのは絶望感です。勉強を続けることもできない。仕事もない。心の底から笑うこともできない。結婚し将来を築き上げることもできない。すべてが真っ暗です。将来は真っ暗なのです。私たちはこのひどい状況のなかで死に向かっているのです。もう自分の人生に対する希望を失いました。 こんな状況だから、若者たちがイスラエルへ行って自爆攻撃をやるのです。つまりこのひどい状況、そのストレスが自爆攻撃へと私たちを導いていくのです。もし私たちに平和な暮らしがあり、働く職場があり、結婚し妻や子どもなど守るべき家族があり、そして自由があれば、誰もイスラエルへ行って自爆などしません。 自爆攻撃でイスラエル人が殺されたというニュースを聞くと、パレスチナ人全員がすっとした気持ちになりますよ。敵に復讐したという気持ちです。敵との戦いは最後まで続くでしょう。この土地は私たちのものであり、イスラエル人はここから出ていくべきです。イスラエルは敵なのです。たしかに状況はいっそう悪化していくでしょうが。イスラエルはミサイルや戦車で攻撃し、家を破壊し、たくさんの住民を殺している。そんな中で私たちは何をすべきだと言うのですか。 もし私がイスラエルに殺されたなら、自分のことをまったく価値のないもののように感じるでしょう。しかしもし自爆攻撃で死んだら、みんなが私に敬意を払います。殺されたり負傷したり投獄された人たちのために復讐し、次の世代のために命を投げ出すのですから。

【77　　　　　　】

でもあなたは今、人の命を救う緊急救命センターで働いていますね。一方でハマスなどが自爆攻撃をすると、すつとした気持ちになるという。それに矛盾を感じませんか。

【78　　　　　　】（パレスチナ人）

なんの矛盾もありません。ここで生活し、ミサイルで攻撃されたり、頭部や胸部を銃撃された患者を見ていたら、怒りがこみ上げてきます。生身の人間なのですから。イスラエル兵は救急車さえ撃ってくるんですよ。救急隊員の仲間の中には撃たれて殺された者もいます。人道的な活動をしていて殺されるのですよ。イスラエル軍には何の人間性もありません。だからなんの矛盾もないのです。

【79　　　　　　】

二〇〇三年八月二一日午後、イスラエル軍の武装ヘリコプターから発射されたミサイルによって殺害されたハマス最高幹部の一人イスマイル・アブシャナブは生前こう語った。

【80　　　　　　】（パレスチナ人）

我われには二つの選択肢があります。降伏しイスラエルの占領を受け入れるか、それとも抵抗するかです。パレスチナ人は抵抗することを選択したのです。まず戦車に投石で対抗した。するとイスラエル軍は多くのパレスチナ人を殺しました。デモもやりました。さらに多くのパレスチナ人が殺され、占領は続きました。 パレスチナ人が自分たちには力があるのだということを発見するまでは世界はただ見ているだけでした。そこでイスラエル内で自分自身を爆破させるという手段を選んだのです。それはイスラエルの占領に対する我われの対応でした。そのとき初めて世界中が私たちパレスチナ人に目を向けたのです。『いったいパレスチナで何が起こっているのだ』と。パレスチナ人は『自分自身の身体を使った』重要な武器を手にし、自己防衛を開始したのです。するとイスラエル人は泣き叫びました。私たちの新しい武器でイスラエル人は占領の代価を支払うことになったのです。 これが我われの行動の背後にある哲学です。それは我われが死を望むからではありません。イスラエル人を殺したいからでもありません。武器を持たない者たちの自己防衛なのです。

【81　　　　　　】

東京の山手線の内側ほどしかないガザ地区におよそ一二〇万人のパレスチナ人が暮らしている。彼らの所有する地域はガザ地区全体の七〇％に過ぎない。残りの三〇％はユダヤ人入植地などイスラエルが管理する地域である。だが、そこで暮らすユダヤ人は約七五〇〇人（入植地側発表／二〇〇二年一月当時）。つまり〇・六％の人口しか占めないユダヤ人が三割もの土地を所有しているのである。また「パレスチナ人権センター」の調査では水資源の一人当たりの年間使用量はパレスチナ人の一七二㎥に対し、ユダヤ人の場合は一〇〇〇㎥と、五・八倍にもなる（「パレスチナ人権センター」調査）

【82　　　　　　】

自爆テロで夫を殺された六人の子どもの母アビゲール・ビトン 三四歳の証言

【83　　　　　　】（イスラエル人）

正直言って、私はアラブ人が大嫌いですし、憎んでいます。彼らが私たちに何をしようとしているか知っているからです。夫を殺されて以来、夫がいないということがどういうことかを実感しています。だからアラブ人を嫌う気持ちは以前より、もっと強くなりました。私たちが何もしていないのに、アラブ人たちは私たちを憎み、殺します。あらゆるアラブ人がそうです。表面的にはとてもいい人のように見え、いい友人のように見えても、次の日には、イスラエル人を殺すでしょう。私の友人の一人は八年前、自分のハウスで働いていたアラブ人によって夫を殺されました。友人たちは、犯人のことをいいアラブ人で、いい関係をもっていると思っていたのですが、ある日突然、雇い主を殺したのです。 ユダヤ人とアラブ人は決して共存できません。彼らも私たちもここの土地は全て自分たちのものだと思っています。私たちは一緒に暮らすことができませんし、そうしたくもありません。

【84　　　　　　】

入植地の市長アブネル・シモニ氏

【85　　　　　　】（イスラエル人）

この土地はユダヤ人に属しています。パレスチナ人は自分たちのものだと言いますが、私たちにはこの土地が自分たちの土地だと証明する聖書があります。ユダヤ人は二千年後、この土地に戻ってきたのです。 アラブ人には周りにエジプトやヨルダンやレバノン、サウジアラビアなど二二の国があるのですよ。一方ユダヤ人には唯一イスラエルという国があるだけです。私たちはイスラエルに留まるためにやって来て、ほんの五二年間で今のイスラエルを創り上げたのです。だからここは私たちの国なのです。将来もそうです。

【86　　　　　　】

ハンユニス難民側の証言

【87　　　　　　】（パレスチナ人）

一〇人の家族を外へ連れ出し、次の通りにさしかかったとき、ブルドーザーが私の家を破壊し始めました。これが私の家の跡です。私の夢だった家をイスラエル軍が戦車で破壊したんです。すべてを失いました。家財道具は全部家の中でしたから。これからどこに住んでいいか分からない、将来どうなるかも全く分かりません。

【88　　　　　　】（パレスチナ人）

戦車に対してカラシニコフ銃でいったいどうやって抵抗できるというのですか。いったいアラブの国々は何をしているんですか。イスラエルは私たちをテロリストと呼びます。しかし本当のテロリストはアメリカとイスラエルです。アメリカはアフガニスタンで、イスラエルはここでたくさんの人を殺しています。

【89　　　　　　】

この事件から三日後の十二月十七日夕方、家の破壊現場から二百メートルほど離れた道路でおもちゃの銃で遊んでいた十五歳の少年がトーチカの中からイスラエル軍に一発の銃弾で心臓を打ち抜かれて即死した。イード二日目で、たくさんの着飾った子どもたちが道で遊んでいたと言う。

【90　　　　　　】

イスラエル人 グシュカティーフ市長アブネル・シモン氏

【91　　　　　　】（イスラエル人）

どうしてイスラエル軍は彼らの家を破壊したと思いますか。これらの状況、戦争の端緒を知らなければなりません。彼らが始めたのです。私たちは何もしていないのにです。イスラエル軍が家を破壊したのは、突然やったのではないのです。彼らの側から爆弾が打ち込まれ、私たちを殺そうとしたから、彼らの家を破壊したのです。突然、何の理由もなく破壊したのではありません。パレスチナ人側からの銃撃で負傷した子どもたちもいます。一二人が殺されました。イスラエル全体では三百人が殺されています。兵士も一般市民もです。これは戦争です。戦争では私たちが人道的に振る舞い、他方が私たちを殺すような状況を受け入れるわけにはいかないのです。

【92　　　　　　】

　水源に恵まれ、西岸でも有数なオリーブと野菜の生産地ジャユース村に、二〇〇三年七月までに約一五〇キロの分離壁が作られた。パレスチナ人は「壁」と呼び、イスラエルでは「フェンス」と呼ぶ。ジャユース村の農地の八七％が壁によって村から切り離され、一二〇の野菜栽培の温室、六つの井戸も壁の向こう側になってしまった。 約五五〇家族、三二〇〇人の人口のジャユース村はそのために四八〇家族の収入源が失われる。 二〇〇三年十一月、七人の子どもの父スタファ・サリーム四八歳の証言

【93　　　　　　】（パレスチナ人）

私たちには五〇ドナム（五ヘクタール）の土地があり、五百本のオリーブの木を所有していました。毎年、そこから収穫するオリーブオイルと実を売って千ヨルダン・ディナール（約一四三〇ドル）の収入がありました。自分の家庭で使うものもそこから十分保存できました。しかし壁の建設で四五ドナムの土地が壁の敷地となるか、壁に遮断されてしまいました。五百本のオリーブの木のうち四百本以上が引き抜かれ、残っているのは五〇本しかありません。しかも壁沿いに安全地域が拡張されると、残った五ドナムの土地も五〇本のオリーブもすべて奪われてしまいます。 これまで土地のためたくさんのお金を投資してきました。井戸を掘り、そのためにも大金を費やしました。建設資材などのほかに一五〇〇ディナールがかかったのです。しかしイスラエルがすべてブルドーザーで破壊してしまい、全ての投資も無駄になったのです。

【94　　　　　　】（パレスチナ人）

ジャユース村村長ファイエズ・サリームの証言 私は今、この村長室の左側の窓を締め切っています。壁建設のために奪われた自分の土地を見るのが辛いのです。六〇〇年以上の樹齢を持つオリーブの木を、破壊された畑から運び家の前の庭に植え替えました。朝起きて先祖代々から引き継がれたオリーブの木を見、そして村長室へ来ると、それがかつて植えられていた土地が目の前に飛び込んでくる。それが辛くて窓を閉じてしまうのです。壁の建設中も、壁の向こう側の農地へ働きに出ようとする村人たちと、これを阻止しようとするイスラエル軍との間で小競り合いが続きました。その後、イスラエル軍の将校が『壁には門を作って自由に移動できるようにするから』と答えました。しかし実際に出来上がってみると、将校の話とは全く違っていました。朝、午後、夕方にそれぞれ一五分ずつ門を開けるだけで、それでは毎日農作業に出かける農民にとって全く足りません。農地へ出かけ、収穫し、そして戻ってくる、その時間は定められないのです。そう訴えても、イスラエル軍は『ノー』と答えるばかりです。朝、門が開くまで農民はじっと門の前で待たなければならない。将校がジープでやってきて、その門を開けます。しかしその時間は決まってはいません。ある時は七時半、ある時は一一時と、彼らの都合がいい時にやってくるのです。 ちょうど一週間前、イスラエル軍は『壁の向こうの農地に行くには、許可書が必要だ』と言い出しました。村人たちにそのことを告げると、皆は『自分たちの村に行くのにどうして許可が必要なのか』と反論しました。私はそれに答えることができません。私はイスラエル軍側と村人側の両方の板ばさみになってしまいました。

【95　　　　　　】（パレスチナ人）

アブ・アッサームの証言 「あれがグリーンライン（六七年以前のイスラエルとヨルダンとの境界）の位置です。そして反対側の東のあそこに見えるのが壁です。イスラエルが言うように『壁はセキュリティー（安全保障）のため』なら、どうしてグリーンラインの上に壁を作らず、六キロも離れたあの場所に壁を造ったのでしょうか。なぜだと思いますか。土地と水を奪い、私たちをこの土地から移動させるためですよ。 通行許可書は農地に実際仕事に出る農民の五〇％ほどにしか出されていません。一方で一歳の子どもや、すでに何年も前に亡くなった者には出されるのです。これは世界に向けて『通行許可書は出している。これはイスラエルのセキュリティーのための処置だ』と示すためのショーなのです。しかしそれは現実とは全く違います。これは間接的な土地の没収なのです。

【96　　　　　　】

二〇〇三年十一月、カルキリヤ市長の証言

【97　　　　　　】（パレスチナ人）

「なぜサルフィートやアリエル入植地周辺へ深く食い込むかたちで壁を造ろうとしているのか。それは水源のためです。水源とパレスチナ人住民とを分離しようとしているのです。一〇月、イスラエル政府はユダヤ人入植地に六〇〇戸の住宅を建設すると宣言しました。そのうち四〇〇戸がカルキリヤ周辺の入植地です。それは水源と土地と主権を奪うシャロン首相の戦略です。水と土地と主権のない国家なんて成立しません。シャロンがやろうとしていることは私たちからこの三つを奪い、将来のいかなるパレスチナ国家も実態として成り立たなくすることです。それを何と呼ぼうと、水源も土地も主権もなく、また内部で自由な往来もできない国家なんてありえないのです。

【98　　　　　　】（イスラエル人）

イスラエル穏健右派元国会議員ダン・メリドール氏は語る 壁を造らないとすれば、他にどうやって私たちを守ることができるというのですか。パレスチナ人は私たちを殺し続けるのですよ。『壁やフェンスはパレスチナ人の権利を侵し、彼らの怒りを招いているからやめろ』というのはやさしい。『市民が巻き込まれるから、ガザ地区などへの爆撃は止めるべきだ。家も破壊すべきではない。追放すべきではない。パレスチナ人はそこに住む権利があるのだから。外出禁止令をしくべきではない。無実の人々が困難を強いられるから村や町を封鎖すべきではない。そうすれば人々が外へ働きに出られなくなる・・・』 すべてはその通りです。しかし私たちはどうすべきなのだろうか。我われが和平を提案したら、パレスチナ人はそれを拒絶しました。現時点では壁建設以外に代替案がないのです」

【99　　　　　　】

分離壁の設計者ダン・シフタン氏は語る

【100　　　　　　】（イスラエル人）

「最も重要な理由は百年以上続いているパレスチナ人との人口比率の“戦争”です。アラブ人はたくさんのアラブ・パレスチナ人をイスラエル国内へ連れ込もうとしています。イスラエルでアラブ人が多数派を占めれば、イスラエルはユダヤ国家ではなくなります。そうなればアラブ人は非アラブ人をコントロールしようとし、ユダヤ人は暮らせなくなります。だから他の国民もそうするように、イスラエルは存在し続けるために闘っています。つまりアラブ人がイスラエルへ入ってくることを阻止し、テロを防止しようとしているのです。イスラエルにとってユダヤ人とアラブ人の人口比率のために壁を造ることは死活の問題なのですから。 もし壁がなければ、イスラエルという国の存在が危うくなるからです。それが壁建設の最も重要な理由です。

【101　　　　　　】

イスラエル建国神話に意義を唱える数人の若い研究者のニューヒストリの一人イラン・パペは語る

【102　　　　　　】（イスラエル人だが、パレスチナ側の視点を持つ）

現在、建設されているフェンスは、単なる『フェンス』ではなく、巨大な『壁』です。その壁が完全に出来上がり、壁の西側がイスラエルに併合されてしまったら、パレスチナ人に残された土地はとても狭い地域でしかなくなります。それを『パレスチナ』と呼ぶことはできても、国家として維持することは論理的に不可能です。国家としての経済的な基盤もなく、政治的なインフラもない、住民の福祉を実施することもできない。現在のシャロン首相は『その一〇％の土地を“パレスチナ”と呼ぼうがどうしようがかまわない』と言っています。それが国家として存在しえないことを知ってるからです。つまりこの五五年間議論されてきた『パレスチナ国家』のアイデアの全ての終わりを意味するのです。国家として存在することは不可能なのだから。 しかも残りの一〇％の土地に残されたパレスチナ人たちを、イスラエルは他の地域に追放する必要はありません。彼らはその状況に耐えられなくて自らその土地を離れてしまうでしょう。経済的、社会的な状況があまりにもひどく、留まり続けるのは難しいからです。私はそれを『大きな牢獄』と呼んでいます。 これはイスラエル人が理解していないことであり、日本人を含めて世界の全ての人々が考えるべきことですが、もし“パレスチナ”という考えが終結し、“パレスチナ”が完全に崩壊させられたら、イスラエルとアラブ世界との関係を完全に変えてしまうことになるでしょう。そしてアラブ世界はイスラエルと直接対決せざるをえなくなります。更にイスラム世界全体もイスラエルと対決しなければならない状況になるでしょう。指導者たちがそれを望まないとしても、そうせざるをえなくなるのです。このような欧米とアラブ世界との関係悪化は、既に現われているように、地球規模の安全保障に影響を及ぼし、どこにいても安全ではあり得ない状況になるのです。つまり戦争状態が世界の誰にでも影響を及ぼしてくるのです。

【103　　　　　　】

一九九六年の三月四日、十五歳の誕生日に自爆テロで亡くなったバッヘン・シャハックの父ツビカは生前娘の書いていた日記帳を開き、和平のため行動を起こす力を得たという。バッヘンの詩

音楽、入る。

【104　　　　　　】

（イスラエル人だが、パレスチナ側の視点を持つ。ただ、この詩の後、テロで死ぬので、イスラエル側に戻る）

「『アラブ人』という言葉は、人によっては、背中に刺さったナイフ、死、石、殺人、 火炎ビン、燃えるタイヤ、テロリスト、などを思い起こさせる。 ラジオのニュースキャスターの 『ユダヤ人が殺されました。テロリストたちは逮捕』 という言葉が耳に入る すると　こう思うの 『私の家族の誰かだったかも知れない』 この憎悪は二〇〇〇年以上も続いている そして私たちもアラブ人もみな恐怖の中で生きている いいアラブ人だっているわよ、って　私はいつも言うの でも耳にするのは殺人者のことばかり 私は平和がほしい 私　最後にはきっと実現できるって信じている だって平和はいきていくためになくてはならないものだもの」

音楽、終わる。

【105　　　　　　】

父親ツビカは語る

【106　　　　　　】（パレスチナ寄りのイスラエル人）

「娘は日記の中に『私たちは無知な娘かもしれない。でもなぜ私たちはお互い殺し合い、和平を求めないのか、それが理解できない』と平和を求める文章を書いています。そんな文章を読んで、私たちイスラエル人は和平交渉を続けるべきだという意志をさらに強くしました。今の政府（ペレス政権）がやっていることが正しい道だと信じています。 和平交渉は妊娠五ヶ月の女性のようなものです。この胎児を取り出そうとすると母体まで死んでしまう。母体はイスラエルそのものです。つまり和平交渉は途中で中止することはできません。その結果が出るまで続けなければなりません。 イスラエルではこれまで一〇年ごとに戦争がありました。多くの若い兵士たちが死んでいきました。お互いのこの殺し合いを終わらせるためには和平を達成するしかありません。私たちの孫たちが戦いで傷ついたり死んだりするのを見たくはありません。和平交渉こそがこの問題を解決する唯一の道だと思います。私たちは同じ地域に住み、隣人と平和に暮らすべきです。パレスチナ人にとって“平和”とは、まず働く場所があり、食べ物が手に入り、子供たちを学校へやり、雨露を防ぐ屋根つまり住居があることです。それが満たされてやっと隣人と友人になることを考え始めます。 とにかくパレスチナ人に尊厳と誇りと希望を与えることです。それが満たされれば、この地域をスイスのような状態にすることができるはずです」

【107　　　　　　】

十九歳の息子をイスラエル兵士に射殺された、遺族の会のパレスチナ側のメンバーの一人マレイハ・アウダウルは語る

【108　　　　　　】（パレスチナ人）

「子どもを失った母親の感情とはどんなものか想像すればいい。死んでしまいたいと思う程に苦しいものです。自分の息子を殺したイスラエル人に会うことに迷い、苦しみや憎しみはありました。しかし私は、残された子供達が、他の国の子供たちのように国を持ち、平和で自由に暮らせるようにするために、殺戮、銃器、家の破壊、樹木の破壊の中で暮らさなくていいようにするためにイスラエル人の家族と会う決心をしたのです。 それは痛みと共に、憎しみと怒りを伴った感情でした。イスラエルの子どもたちは各家に庭を持っています。いい自転車に乗って遊び、公園もある。それに比べ私たちパレスチナ人の子どもは部屋の中で遊ぶスペースもないのですから。 そういう感情を抱きながらも、私はイスラエル人の遺族たちに合いました。 “平和”とは平穏で、自由で、そして生活が安定し、さらに自分の国を持ち、自分たちの土地に主権と自決権をもって生きることです。入植地もなく、政治犯もなく、占領もない状態です。神聖な私たちの土地を取り戻し、エルサレムの上にパレスチナの旗をかかげることです。私たちは完全な自由が保障され、国連決議が実行されることを要求します。そして子どもたちの将来が保障されることです。

【109　　　　　　】

この本の著者、土井敏邦さんはこう書いている

【110　　　　　　】

イスラエル人が願う“平和”「シャローム」と、パレスチナ人が求める“平和”「サラーム」。双方の遺族たちは子どもを殺された悲しみや憎しみを越え、対話によって同じく“平和”を模索しながらも、それぞれが思い描く“平和”は決して同じではない。それは一方が圧倒的な力で占領し支配する側に属する者で、他方はそれに占領され支配される側にいる者であるという決定的な環境の違いによるところが大きい。 もちろん、対立する両者の個人的な対話は、解決の道への第一歩ではある。だが、それが問題の構造そのものの変革につながらなければ、和平と和解の現実は難しい。

音楽、入る。

【111　　　　　　】

　食器を洗う手

【112　　　　　　】

　コーヒーを入れる手

【113　　　　　　】

　頬を撫でる手

【114　　　　　　】

　抱きしめる手

【115　　　　　　】

　そんな手が消える

【116　　　　　　】

　消える　消える

【117　　　　　　】

　もう、いない

【118　　　　　　】

　今朝までそこにいて　そこで笑って私を見つめていた顔が

【119　　　　　　】

　消える

【120　　　　　　】

　顔が消える

【121　　　　　　】

　消える

【122　　　　　　】

　消える

【123　　　　　　】

もう、いない。

【124　　　　　　】

　言葉が消える

【125　　　　　　】

声が消える

【126　　　　　　】

仕草が

【127　　　　　　】

ぬくもりが消える

【128　　　　　　】

消える

【129　　　　　　】

消える

【130　　　　　　】

もう、いない。

【131　　　　　　】

もう、二度と　会えない。

朗読者、ハケる。音楽、終わる。

森山良子　歌「ざわわ」

休憩（十分）

**引用出典一覧**  
『パレスチナ 瓦礫の中の女たち』若者：古居みずえ　岩波書店  
『パレスチナが見たい」著者：森沢典子　株式会社阪急コミュニケーションズ  
『死んだらいけない』著者：石川文洋　日本経済新聞社  
『パレスチナ ジェニンの人々は語る ー難民キャンプイスラエル軍侵攻の爪痕ー』著者：土井敏邦　岩波書店  
『現地ルポ パレスチナの声、イスラエルの声』著者：土井敏邦　岩波書店  
「パレスチナ・ナビ」ナブルス通信より  
　「ラファの子どもたちの声」一侵攻を体験した子どもたちからー」  
　「兄の死一ガザ最南端のラファより」  
　「僕たちは殺されていく」  
　「ラファが変に服しているときに殺された子ども」  
　http://www.onweb.to/palestine/  
声明文「子どもたちを軍事行動に巻き込まないために」パレスチナ子どものキャンペーン 2004年4月11日  
　http://www32.ocn.ne.jp/~ccp/contents/tophtm/040327top/declaration2.html